

## 木下杢太郎の欧米体験 (3)

Mokutaro Kinoshita in America and Europe (3)

鈴木 秀 治

SUZUKI Hideharu

愛知大学国際コミュニケーション学部

*Faculty of International Communication, Aichi University*

*E-mail:hsuzuki@vega.aichi-u.ac.jp*

### Abstract

Mokutaro Kinoshita (1885 ~ 1945) was a doctor, but, on the other hand, wrote many poems and novels, and also painted. He went to America and Europe for medical study and was given a great stimulation by foreign culture. I am engaged in consideration of the influence which these experiences in America and Europe had on his work.

## XII. 旅への誘い

1923 (大正 12) 年 1 月初めから 4 月半ばまで、エジプト、イタリアを訪ねる機会に恵まれた。2 年前の秋、フランスはパリに到着以来、大きな旅行はしていなかった。今回の旅行は欧米留学中で最も期間が長いものであると同時に、いわゆる研究から解放された自由な旅であった。旅への誘いは偶然に訪れた。実業家原三溪の息子原善一郎夫妻から、エジプト、ギリシア、イタリアに旅行するときに、同行してくれるように頼まれたのである。夫妻とも身体が弱く、その健康の顧慮から杢太郎の同伴を依頼したからである。旅費は原家の負担であった、

ヨーロッパを根底的に理解するためには、ギリシア・ラテンにまで遡る必要があると考

えていた杢太郎であったから、個人的にもギリシアとイタリアを訪れる心積もりはあっただろうと想像される。またエジプトについては、アメリカのシカゴ美術館とメトロポリタン美術館でエジプト美術にふれてから、エジプト文化への関心が生まれている。けれども、原善一郎から誘われなければ、わざわざエジプトの土を踏むことはなかったであろう。しかし、このエジプト行きは杢太郎にとって予想以上に意義深いものとなった。

さて、父親の原三溪と杢太郎の関係について、『新潮世界美術辞典』と竹田道太郎『原三溪 近代日本画を育てた豪商』（有隣堂）によって簡単に示しておこう。原三溪（富太郎：1868-1939）は、生糸業者としてまた生糸貿易家として財を成した実業家であるとともに、美術蒐集家としても知られた人物である。横浜本牧にある日本庭園の三溪園を早くから（1906年）公開して、蒐集した美術品をそこに展示した。また同時代の画家を養成するために再興日本美術院を中心とする画家を物心両面から援助した。美術家とのつきあいばかりでなく、当時、新進の学者であった矢代幸雄とその友人の学究たちとの交流も生まれた。その中に和辻哲郎や児島喜久雄などの名前もあった。美術に造詣の深い杢太郎も、三溪とは面識があった。

今回の旅行に加わったメンバーは、原善一郎夫妻、阿部次郎、児島喜久雄、小林古径、前田青邨、杢太郎にふたりの女性を加えて総員9名であった。日本画家の小林古径と前田青邨の二人は、ヨーロッパ留学の途中で、この一行に加わるようになった。美術を論じて一家言をなす杢太郎と児島喜久雄は、また自ら絵筆をとって友人はだしの絵を描いた。旅行中、杢太郎が古径と青邨のふたりとどのような言葉を交わしたか興味津々だが、それを伝える文章が残っていないのは残念である。

### XIII. エジプト——息抜きの旅

もともとエジプト旅行は杢太郎自身の選択ではない。原三溪の息子夫妻のお付き添いとして、いわゆる観光旅行に出かけたのである。しかも、同行したのは話の通じる学者や芸術家であり、旅費も原家が持つことになっていた。杢太郎はほとんど誰に気兼ねせずただ旅行を楽しめばよかった。たしかにエジプト行きに関しては、それで済んだのだが、その先のギリシアとイタリアについていえば、必ずしも物見遊山で終わらせるつもりはなかったであろう。杢太郎としては大いに期待してかまわなかったはずだが、むしろ逆に感激が起きないのではないかと不安になるのであった。

杢太郎は陸路でイタリアを経て、海路でエジプトに向かうことになって、1月10日に南仏ニースに到着した。ここから与謝野晶子にあてた形で書かれた「羅馬へ」という文章に次のような言葉がある。

昔の澁刺たる感受性を疾うに失った頭に伊太利亜、希臘が共鳴、感激を起させるかと云うことも、大いに不安です。(中略)

希臘、伊太利亜が小生のために第二の雲崗石仏寺になつてくれるかどうかについて、多大の疑念を抱いているのです。(中略)

羅馬は近づきつつありますが、動悸もせぬ寂しさ。

雲崗石仏寺とは、中国、山西省大同市の西約 20 キロメートルにある石窟寺院のことである。杢太郎は 1920 (大正 9) 年、南満医学堂を辞めた年の 9 月に画家木村莊八とともに同寺を訪れた。「考証的の仕事は後日の機会に譲って我々は (大同芸術を) 最も幸福に、絵画的に享樂したのです」(『雲崗日録』) と自ら語っているように、この大同石仏寺が与えてくれた感激は並たいていのもではなかった。それから数えて 2 年と 4 か月で、ヨーロッパの杢太郎は自らの感受性の喪失をなげくようになった。

ニースからエジプトのカイロに到着するまでの行程を簡単に示しておこう。主として『木下杢太郎画集』第 2 巻紀行篇 (用美社) に収録された新田義之氏の解説に従っている。1 月 12 日、ローマに到着する。1 月 16 日に郵船オルモンド号に乗り込み、1 月 18 日にポートサイドに着き、カイロに向かった。このカイロで一行と合流したと思われる。

さらに、エジプト旅行の経過を示しておこう。こちらも同じく、主として新田義之氏の解説によっている。カイロでは考古学博物館に通い、エジプト彫刻の模写を残している。ここからナイル川を遡りルクソール、カルナックを訪れ、一度カイロに戻り、2 月 3 日にカイロからアレキサンドリアに向かった。アレキサンドリアでもグレコ・ローマン博物館を見学、やはり模写を行っている。アレキサンドリアから海路でナポリに渡って、一行と別れて後は、イタリア各地をひとり旅で回ることになる。

このエジプト旅行から生まれた文章は「テエベス・百門の都」と「埃及旅行の後に」の 2 篇を数えるのみである。前者は純粋な紀行文であるが、後者はエジプト旅行に端を發した杢太郎の文明論ともいべき作品である。

さて、「テエベス・百門の都」であるが、いままでこのタイトルについて触れている文章はないので、ここで簡単に解説を加えておこう。テーベあるいはテバイは古代エジプトの都市で、現在はルクソールと呼ばれている。今日でもルクソールはエジプト旅行では欠かせない重要な訪問地である。「百門の都」という言葉は、古代ギリシアの詩人ホメロスの叙事詩『イリアス』の第 9 歌の中に見られる。翻訳で該当箇所を示しておこう。「エジプトのテバイ——ここでは家々に莫大な富が貯えられ、城門の数は百、それぞれの門からは二百の兵が戦車を列ねて出撃できる」(松平千秋訳)。

「テエベス・百門の都」は杢太郎の紀行文らしく格調は高いが、いささか晦渋である。エジプト旅行はこれといった目的があるわけではなく、いわば息抜きの旅であったが、キュー

バ旅行のように心身ともにくつろいだ気分にはならなかった。

ルクソールの街を東西に分けて流れているのはナイル川である。東岸の南にルクソール神殿があり、北にはカルナック神殿がある。この「ルクソールの大社」について、杳太郎は次のような文章を残している。「テエベス・百門の都」の中では比較的わかりやすい箇所として取り上げてみよう。

此の建物の構造の細目や其歴史のことなど、今案内書から鈔することもなからう。昼間の日の光でルクソールの大社の現場を踏んだ時の印象が、唯大きさに対する驚きだけに限られて居て、他の期待が失望に近い感情で報いられたことだけを此に記して置けば十分であらう。この社の本当の入口の前には六基の巨像（ラムセス二世像）に並んで二つのオベリスクがあつた。其一つは巴里のコンコルド広場に持ち去られて、今此に遺るのは唯一つである。あれだけ広いコンコルドの広場に、どつしりとした建築的中心となるべく、彼のオベリスクは決して小さきに過ぎない。而も此に於いては、一個のオベリスクなどは殆ど問題にもならぬのである。古の大都テエベスから一つのルクソールの大社のみが残つてゐたわけではなかつた。此晩月を浴びて「カルナックの大社」に詣つたとき、我我は始めて此地に来たことを衷心から感謝したのであつた。

ここで語られていることは、以下のとおりである。昼間ルクソールの神殿を訪れたとき、その大きさには驚いたが、それ以外はむしろ期待はずれだった。この神殿の入口にはオベリスクが二つあつたが、その一つはフランスに送られて、現在パリのコンコルド広場に建っている。広いコンコルド広場の建築的中心として高くそびえている。ところが、どれも巨大なルクソール神殿にあつては、もう一つのオベリスクの大きさなどは問題にもならない。しかしながら、夜に月光を浴びてカルナック神殿を訪ねたとき、ルクソール神殿で感じた失望ではなく、古都の神殿への期待が満たされ、エジプトに来たことを心から感謝した。けれども、どうしてカルナック神殿では感謝の気持ちが生まれたかについては、はっきりした説明が見当たらない。

ここで、少し角度を変えて杳太郎の欧米滞在中に描かれた絵画についてふれておこう。もともと画家志望だった杳太郎は、その生涯を通じて文学者としてはかなり多くの絵画を描き残している。その画業の大半は、『木下杳太郎画集』全4巻（用美社）と『百花譜』（岩波書店）におさめられている。欧米滞在中に描かれた絵画は、前述の『画集』第2巻紀行篇で見ることができる。この画集で数をかぞえてみると60枚になる。多くは紀行文の挿絵として描かれたもので、スケッチや水彩画が多い。

諏訪丸船上で描かれたオランダ少年の肖像画を含めてアメリカでは8枚、キューバでは3枚、イギリス（ロンドン）では6枚である。フランスでは9枚であるが、パリで描いたの

はドラクロワの壁画「ヤコブと天使の戦い」(サンシュルピス教会)の模写、パリの通りのスケッチ、サンルイ病院で描かれた若い女性の肖像画の3枚を数えるのみである。他はブルターニュ旅行で生まれた5枚、ストラスブールで描かれた1枚である。

つぎはエジプトであるが、全部で21枚と他の国と比べて圧倒的に数が多い。その多くはカイロの考古学博物館の彫刻などの模写(12枚)およびアレキサンドリアのグレコ・ローマン博物館の彫刻の模写(2枚)であり、他にはカイロの町と人々のスケッチ、ナイル川風景、カルナック神殿のスケッチなどである。イタリアでは3枚で、内容はアマルフィの風景1枚とミラノにおけるレオナルド・ダ・ヴィンチ「最後の晩餐」(サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ修道院)の部分的な模写2枚である。

最後はスペインとポルトガルで、前者が8枚で後者が2枚である。ただし、スペインとポルトガル旅行は目的も同じであったから、これをまとめて10枚と数えるのがよい。サン・セバスチャン、サラゴサ、アルカラ、コルドバ、セビリア、コインブラといった町々の風景、建物、人々などが描かれている。

パリなら描く題材はいくらでもありそうであるが、柰太郎の絵筆はいつこうに動かなかった。フランスといっても、パリならぬブルターニュの旅行中なら、いくらか気分もはずんで風景画4枚と人物画1枚の合計5枚の絵を描くことができた。パリではあれほど進まなかった柰太郎の絵筆は、エジプトではいきいきと動いた。エジプトは観光旅行で訪れたわけで、いささか解放された気分があったからであろう。文章を書くより、絵を描くほうが楽しかったのかもしれない。『木下柰太郎画集』を見る限りでは、旅行に出たときに絵筆が進んだといえそうである。

2005(平成17)年の6月から7月にかけて、東京の国立近代美術館で「小林古径展」が開催された。その際に、同じエジプト旅行中に古径が描いたエジプト彫刻の模写が展示されていた。そのうちのふたつは柰太郎が描いた模写と同じ彫刻を取り上げていた。カイロの考古学博物館に展示されているラヘテプ(ヘリオポリスの太陽神殿の神官)の妻ネフェルトおよび猫の彫刻の模写がそれである。とくにネフェルト像の模写では、古径と柰太郎がよく似ているのに驚いたおぼえがある。

古径は若いときから模写と写生によって技量を磨いた画家である。柰太郎の模写はネフェルト像を描いた作品をはじめとして、専門の画家古径にひけをとるものではなく、画家柰太郎の存在感を示している。模写だったから出来ばえに差がつかなかったともいえるが、エジプトでは気分よく描くことができたためでもあろう。

エジプトで書かれた手紙はわずか2通である。筆まめな柰太郎にしては非常に数が少ない。やはりエジプトでは絵筆より文筆のほうが振るわなかつたのであろう。日記にもほとんど記述がない。2月4日付の手紙は、内田貢(魯庵の本名)宛である。相手が話の通じる文学者とあって、柰太郎の本音が出ている。アレキサンドリアから投函されたこの手紙を

引用しておこう。

埃及にてリユクソウルまで廻り土木工事の規簿<sup>(ママ)</sup>の大なるハ想像以上に候 Cairo の博物館ニ於て又原場<sup>ママ</sup>ニ於て見候ものより古埃及人が形及び Proportion ニ対する感じの鋭敏なる敬服いたし候と角世界はひろく驚くことばかりにて大和魂も少々へこたれ申候

ルクソールを見学した李太郎は、古代エジプトの遺跡の規模壮大な点は認めている。また古代エジプト人は形および均衡に対する感じが鋭敏であることに敬意を払っている。さきほど引用した「テエベス・百門の都」の部分が書かれたのは1月31日であり、この手紙は2月4日に書かれている。「百門の都」ではエジプトの遺跡の大きさを認めるにしても保留がついている感じだったが、ここでは本音を吐いている。エジプトでは感激はなかったかもしれないが、少なくとも驚きはあった。「大和魂」などという言葉の口にしそうもない李太郎が、「大和魂も少々へこたれ申候」と書いている。言いえて妙であり、またユーモアのセンスをも感じさせる。

さて、エジプト旅行が生んだ、もうひとつの文章「埃及旅行の後に」を取り上げてみよう。これは雲岡石仏寺を一緒に訪れた画家、木村荘八に宛てた手紙の形で書かれている。まず李太郎は「埃及は僕の全く予期しなかった収穫であった。若しH氏が僕を其旅行に促さなかつたら、僕には永久に未知の国土として終わつたらう」と切り出している。その後について、この文明は地球の開明になった根本的の土台で、今に伝わるその遺物だけでも、単に考古癖からでなく、現代の生活を豊富にするものであると、エジプト文明を称揚している。

李太郎は次のように語っている。自分もだんだんと世界文明の歴史の遠近法を見ることに慣れてきた。特殊の郷土的の親しみの感情を重視しすぎないようになった。日本の文化および芸術の系統は支流に見える。その支流のうちで、旧世界（東方およびヨーロッパ）の高所から眺めても、朝鮮の慶州（石窟寺）から奈良の推古天平へ流れているものだけは、いかにも力強く生き生きとして見える。しかし、その後の平安朝、源平、室町はよほど地方的である。われわれを育みわれわれに恋愛の形式を教え、われわれに世間の苦楽を知らせてくれた徳川時代などは、涙の出るほど痛ましい、小さい無知の姿を示している。

李太郎は世界文明史の観点から日本の歴史を振り返って、日本の文化・芸術は支流であると断定する。この観点からすれば、李太郎の青春そのものであった「パンの会」が依拠した理念のひとつである徳川時代は、「小さい無知」として退けられる。日本が支流であるならば、何が本流なのか。その答えを知るために、次の文章を引用しておこう。

朝鮮、日本の芸術は支流であっても支那のものは支流でない、是は今不毛な原を

流れる大河になつてしまったけれども、其灌漑した処は、この地球を豊富にした肥沃地である。今其流域が荒蕪に帰したのは文明の種類に因る命運と云ふことよりも、更に耕人の悪るかつたことに其罪を帰すべきである。此涸れかかつた河（印度及び其仏教的文明をも包括して）を蘇生せしむるのは我々の責任だ。そして随分楽しみな仕事だ。蘇生せしめるとして別段変つたことではない。我々が新たに、泰西文明から習得した智識と見識とで、今迄不十分に、不判明に非方法的に見ていた態度を捨てて、明に、方法的に研究しなおせば可い。

本流とされたのは中国の文化・芸術であつた。この中国は今でこそ不毛な原野を流れる大河のごとくなつてしまったけれども、この河が灌漑した（すぐれた文化・芸術をもたらした）ところは、地球を豊富にした肥沃地である。この涸れかかつた河（インドおよび仏教文明も含めて）を蘇生させるのはわれわれの責任である。そのためには、われわれが新たに西洋から習得した知識と見識をもって、今まで不十分に、不明瞭に、非方法的に見ていた態度を改めて、明晰に方法的に研究しなおせばいい。杢太郎はあくまでも積極的な姿勢をつらぬいている。

さて、日本の歴史を振り返ってみれば、近代以前の日本はつねに中国の影響下にあつた。世界文明史の観点からアジアの国である日本・朝鮮・中国の文化・芸術を考えるという杢太郎の説は、その当否は別としてスケールの大きな文明論であることはまちがいない。

欧米留学を終えて帰国した杢太郎は、約1年後の大正14（1925）年7月29日に名古屋で「日本文明の未来」と題された講演を行っている。この講演の重要性については、つとに杉山二郎氏が『木下杢太郎 ユマニテの系譜』（中公文庫）で詳細に述べている。杢太郎はこの「日本文明の未来」をはじめとして、世界文明史を視野におさめたスケールの大きな文明論をものしているが、これらはいずれも欧米体験があればこそその仕事である。しかも、そうした文明論にもエジプト体験がなんらかの影響を与えていると考えることもできよう。

さて、エジプトの次の目的地はギリシアであつたが、あいにくアテネで流行病が発生してギリシア行きは見合わせざるをえなかつた。2月3日、一行はカイロを経てアレキサンドリアに行き、翌2月4日に船でナポリに向かつた。

#### XIV. イタリア——義務の旅

アレキサンドリアからナポリに到着したのは、おそらく2月4日であろう。『日記』にはこの日以降、2月10日まで記述がない。その2月10日には「朝十時頃、メシナに近く／タオルミナ」とある。メッシーナもタオルミーナもシチリア島の街である。たぶんこの日の朝10時にタオルミーナに着いたのであろう。タオルミーナはシチリア島北東岸の観光地で、

古代ローマ時代の史蹟が多い。『日記』にあらわれる次の記述は、2月12日であり、午前6時にナポリに到着したことがわかる。ここから推察できることは、2月4日以後に、一行はナポリからシチリア島に渡って、シチリア観光を楽しんだことである。シチリア島の主要な観光地なら1週間あれば十分に見学できる。シチリアを訪ねたことは、児島喜久雄の「太田君の雑然たる思い出」という回想にも書かれている。

ところで、イタリア旅行に関していえば、『日記』には日付と滞在地と第何番目の夜にあたるかが記されているだけで、3月29日シエナ到着の日にかかれた長めの文章を除けばイタリア旅行の感想などはほとんど何も記述がない。「イタリア」と題された『日記』は、エジプトに渡る以前の1月12日（ローマ滞在の日）から始まっている。しかし、エジプト旅行の記述に関していえば、イタリア旅行よりもそっけなく感想などもまったく見出されない。

ここで少々煩雑になるが、主として日記の記述にしたがってイタリア紀行の足跡をたどてみよう。2月12日、ナポリでは「午后に musée にゆく」とある。たぶん考古学博物館のことだろうと思われる。2月14日にナポリを離れて、ポンペイを訪れている。この日はどこで泊まったかはわからないが、翌15日はソレント、16日はアマルフィを訪れ、17日も同地に滞在している。このアマルフィ訪問によって、イタリア旅行で生まれた唯一の紀行文「アマルフィ」が書かれることになる。

この「アマルフィ」によると、2月16日に「今朝一行と別れ、9時出帆のカプリ行きの汽船に乗り、ソレントオで降り、それから馬車を備うて再び此アマルフィに來り、ホテル・ルナに投宿した」。これによると、この日に一行と別れて、イタリアの一人旅を始めたことになる。翌17日もアマルフィに滞在、下痢をしたとの記述がある。18日から22日までソレントに滞在する。紀行文「アマルフィ」の一部と、先述した「埃及旅行の後に」はソレントのホテルで書かれたものである。

2月22日にソレントを出て、ナポリに戻っている。翌23日にナポリを出発して、ローマに到着している。ローマには2月23日から3月2日まで滞在したことは間違いないが、ローマの最終日は確定できない。記述はいきなり3月29日に飛ぶ。この日にシエナに到着し、翌日夜にピサに行く予定だったが、実際にピサを訪れたのは31日であった。またこの29日の日記には、「フロレンスにて風邪」とあるので、3月3日以降、29日までの間にフィレンツェを訪れたと思われる。3月30日はシエナ、31日はピザで、ドウオーモなどを見学している。

4月1日は「フィレンツェ？」との記述がある。翌2日の午後2時にフィレンツェを出て、6時にボローニャに到着。3日にボローニャを出発、夜パドヴァに着く。4日にパドヴァを出て夕方ヴェネチアに到着。ヴェネチアには8日まで滞在、この日午後5時50分にヴェネチアを出発して、ミラノに向かう。ミラノ到着が何時だったかはわからないが、翌日には



ミラノに着いたと思われる。9日と11日には「ミラノ？」というあいまいな記述があるが、10日には、はっきりと「ミラノ滞在」と書かれている。

ここから記述は4月16日に飛び、14日にミラノからリヨンに帰着していることがわかる。ようするに、一行と一緒にだった2月4日から始まって、4月14日にミラノを離れるまでの70日をイタリア旅行についやしたのである。今回の欧米留学の中で、純粋な旅行としては一番長いものである。杢太郎はイタリアをどうとらえたのか興味津々であるが、それを知る手がかりはまことに少ない。

手がかりとして、まず先述の「アマルフィ」がある。これはアマルフィとソレントに滞在したときの経験に基づいて書かれている。「里昂より」はフランスのリヨンに戻った杢太郎がみずからイタリア旅行をかえりみた貴重な文章を含んでいる。ところで、イタリア旅行中に書かれた手紙は2月21日付の妻正子宛、4月7日付のヌエツ宛（フランス文、ただし未発送）、同じく4月7日付の『明星』宛の3通を数えるのみである。

イタリア旅行のあいだ、日記の中で杢太郎はなぜ沈黙を守ったのであろうか。それを考える手がかりとして、親しい友人の和辻哲郎のエッセイ「享楽人」（『和辻哲郎随筆集』岩波文庫）を取り上げてみよう。

木下は青年のころゲエテの『イタリア紀行』を聖書のごとく尊んでいた。この書が彼にいかに強く影響しているかは、『地下一尺集』の諸篇を読む人の直ちに認めるところであろう。確かに『イタリア紀行』のゲエテは彼のよき師であった。（中略）

彼は恐らくイタリアにおいて、フランスにおいて、故郷に帰ったような心の落ち着きを感じずであろう。そうしてそれは彼を再び十年前の夢に引き戻すであろう。そこで昔の師が再び彼の心を捕えなくてはならぬ。

このエッセイは雑誌『人間』の1921（大正10）年5月号に掲載された。杢太郎が日本郵船「諏訪丸」の乗客となりアメリカ向かったのは、この年の5月だったから、「享楽人」が書かれたのは、杢太郎が欧米留学に日本をたつ少し前だったことがわかる。杢太郎は「アマルフィ」の中でゲエテの『イタリア紀行』に言及している。その箇所を引いておこう。杢太郎はアマルフィの宿で郷里からの手紙を何通か読んだ。その手紙によると、日本では二三の銀行が破綻したと報じられていた。それが暗示するのは、不景気のために人の心が発動性を失ったことだと杢太郎は指摘する。

此の<sup>わか</sup>壯い身空でぶらぶらと南伊の勝概を遊歴するのは気の咎めることであつた。で気を換へるためにゲエテの伊太利紀行のナポリの章を繙いたら、直ぐにいい文句が見つかった。（この本は今はどうも昔読んだほどには感じないが、百年前の悠暢な気分が

出てゐて心を朗らかにさせる。)

今回の旅行で、杢太郎が『イタリア紀行』について触れたのは、この箇所のみである。杢太郎が見つけたいい文句とは何だったのだろうか。読者は誰でもそれを知りたく思う。けれども、何の記述もないのである。ゲーテの『イタリア紀行』は青年時代の杢太郎にとって聖書のようなものだったから、イタリア旅行にも忘れずに携帯した。けれども、若い頃に読んだほどには感じる事がなくなっていた。帰国以後、1932(昭和7)年に杢太郎は「ゲエテの伊太利亜紀行」なる一文を発表している。それにも、「僕も1923年ゲエテのかの書を携へ伊太利亜を旅行し、こんな筈ではなかったがと思つたこともある」という似たような一節がある。

南イタリアの景勝地を訪ね歩くことに気がとがめていた杢太郎の心を、ゲーテの『イタリア紀行』は朗らかにしてくれた。けれども、和辻哲郎の言葉とは反対に、師であるゲーテが再び彼の心を捕らえることはなかった。和辻の推測が外れたのは、これだけではない。イタリアにおいてもフランスにおいても、杢太郎は故郷に帰つたような心の落ち着きを感じずることはなかった。

イタリアを初めて訪れた人は、まず各地で目にするルネッサンスの遺産に驚かされる。西欧の歴史と文化の精華を目の当たりにして、感嘆せずにはいられない。ヴェネチアやフィレンツェは街それ自体が美術館・博物館である。図版では親しんでいたレオナルドやミケランジェロやラファエロも、原物に接するとまるで初めて見るかのようなのである。いや、誰もが知っている観光名所ばかりではない、日本人にはあまりなじみのない街のそこここにも歴史が残っていて、旅人は思いがけない過去の遺産に出会うのである。

杢太郎はイタリアで驚きを感じなかったのだろうか、感動をおぼえなかったのだろうか。その問いの答えとして、「里昂より」の中に、次のような箇所がある。少し長いが引用しておこう。

わたくしはもう文章を書くことが<sup>ものう</sup>慵くなりました。埃及、伊太利亜でも、時とする  
と、印象や感想を書き留めて置かうかと云ふ氣を起したこともあります。かふ云ふ  
土地、殊に伊太利亜に関するものなどは、それこそ汗牛充棟も<sup>ただ</sup>管ならぬほどで、今更  
市市<sup>まちまち</sup>の料理のうまさまずさ、樺の新芽を透けて見ゆる古都の態、古壁の汚れ具合の面  
白さなどを記録したつてつまらないし、昨日今日覚えたばかりの復興期前期の画工の  
フレスコの味など品定めしたら、それこそ物笑ひ。それに物を書くことが<sup>すで</sup>已に苦しい  
し、書く順序を定めたりすることはいよいよ<sup>おくくふ</sup>億劫です。(中略)

何事でも唯名と幻想である間はいいが、いよいよ実物と交渉を始めると、中中美しく  
く好い事ばかりではありません。伊太利亜の旅行がさうで、古作品を観ることは、も

はや興味より為事になり、往々うんざりしました。倦きたから早く止めようとする、重要な都会が連珠のやうに列んでゐて、目をつぶつて素通りもならず、全く泥田に足をつき込んだものがき方でした。(中略)

黄金の富のまなかにも人生の悲しみはあるごとく、伊太利亜のごとき文華の庫の裡にも実際<sup>ときどき</sup>時時やりきれないアンニュイがありました。そして伊太利亜を旅行してゐると実験室<sup>ラボラトワール</sup>の為事が恋しくなり、実験室にゐると、その外にもつと立派な世界が笑つてゐるやうに感じられます。この争がいつもわたくしの勇気を挫くのに閉口します。

イタリアを旅行中に印象や感想を書きとめておこうと思うことはあつた。けれども、イタリアに関していえば、すでにあまりに多くのことが書かれている。いまさら屋上屋を架す必要があるだろうか。こう考えると、筆をとるのが億劫になる。柰太郎は文章を書くことになると、自分自身に対して非常に厳しい態度をとる。オリジナルなものを含まない文章を発表するくらいなら書かないほうがいい。これは一種の完璧主義というものだろう。自分で自分を縛つてしまえば、筆は進まなくなる。

けれども、食について一家言を持っている柰太郎が、イタリア・グルメ探訪記を書いたらおもしろいものができるのではないか。また、紀行文の名手である柰太郎が、イタリアの古都の印象を書きつづれば、つまらない文章になるわけがない。たしかに、昨日今日覚えたばかりのルネサンス前期のフレスコ画について、知ったかぶりするのをいさぎよしとしなかつたのは柰太郎らしい態度であつた。だからといって、せつかくイタリア旅行に70日もかけたのに、まとまつた紀行文もほとんど書かず、日記に感想や印象も記さずに済ませてよいとは思えない。

ここで、再び和辻哲郎を引き合いに出すことにする。和辻には『イタリア古寺巡礼』という著書がある。1927(昭和2)年、京都大学助教授だつた和辻は文部省の海外留学生としてドイツにおもむいた。留学期間は同年2月から翌年7月までの約1年半であつた。最初の年の年末から3ヶ月余にわたつて、イタリア各地を訪ね歩いた。そのときに出会つた絵画、彫刻、建築の印象などを書いた美術紀行が『イタリア古寺巡礼』である。その元になつたのは、旅行先から日本の夫人に宛てた手紙である。当時、和辻は38歳であつた。

和辻はその序文で、「この書は、20年前著者がイタリアを旅行したとき、行く先々のホテルで気軽に書いた私信を収録したものである」と書いている。単行本にするとき、手を入れて編集しているとはいえ、内容は夫人宛の私信であつたから、気楽に筆を執ることができた。もともと、専門的で学問的な著述を目指したものではない。イタリアの絵画、彫刻、建築などに実際に触れたときの印象や感想から出発して、精細な観察と鋭敏な感受性と柔軟な思考にまとめられた西洋芸術・文化論である。いま読んでみても、決してつまらないものではない。

和辻は杢太郎と同じようにひとりでイタリアのさまざまな都市を訪れた。和辻を突き動かしていたものは、この国の文化・芸術に対する知的好奇心である。イタリアの都市を精力的に歩き回っては、美術館におさめられた多くの絵画や彫刻、教会をはじめとした建築の数々を見て、第一印象が消えないうちに旅宿で長い手紙をしたためる。そんな勤勉さによって、この美術紀行が生まれた。

杢太郎がイタリアを旅行したのは37歳のときだったから、和辻の歳とほとんど同じと行ってよい。また、旅行の期間は杢太郎が70日(2ヵ月と10日)、和辻が3ヶ月余であるから、杢太郎のほうが20日ほど少ない。けれども、イタリアだけの旅行なら70日あればまず十分といえるだろう。先述したように杢太郎は南仏の街ニースで、イタリアが自分に感激を起こさせてくれるか不安であると告白していた。はからずも、その不安は的中した。和辻のイタリア旅行にあつて、杢太郎のイタリア旅行になかったものは感動である。杢太郎は知性・感性・才能、どれをとっても和辻に劣るものではない。杢太郎がイタリアで感激を覚えていたなら、『イタリア古寺巡礼』に負けない、すぐれた紀行文が生まれたにちがいない。まことに残念である。

杢太郎はイタリアで感動を覚えなかったばかりではない。むしろ倦怠を感じた。杢太郎は次のように考える。どんなことも、ただ名と幻想の間はいいが、いよいよ実物と交渉を始めると、なかなか美しくよい事ばかりでは済まない。まさにイタリア旅行がそうで、古い美術品を観ることは、もはや興味より仕事になってしまい、往往うんざりであった。

若い頃、画家を志望していた杢太郎にとって美術はなくてはならないものであった。美術作品を観ることも、自ら絵筆をとるのも楽しみであった。つまり、美術は杢太郎にとって大きな慰めだったのである。それが、今回のイタリア旅行では、興味ではなくて仕事(義務)になってしまった。なんという大きな矛盾であることだろう。

これを整理してみると、エジプトは杢太郎にとって息抜きの旅だとすれば、イタリアは義務の旅だったといえよう。義務の旅に倦きて早くやめようとする、見ておかなければならない重要な都会が数珠つなぎになっていて、目をつぶって素通りするわけにもいかなかった。「全く泥田に足をつき込んだもがき方でした」という言葉に杢太郎の苦悩が集約されている。

さらに、杢太郎の言葉をたどってゆこう。イタリアのような華やかな文明の収蔵庫の中にも、実際ときどきやり切れないアンニュイがある。そして、イタリアを旅行していると実験室の仕事(医学の研究)が恋しくなり、また、実験室にいと、その外にもっと立派な世界(文学・芸術)が笑っているように感じられる。このふたつの争いがいつも杢太郎の勇気をくじくのである。

ところで、師ともいべき森鷗外は、自分にとって最も大切なふたつのもの、つまり医学と文学を峻別して、昼には医学の仕事をこなし夜に文学の創作をするという二元的な人

生を送った。身近に鷗外というよい手本がありながら、杢太郎はそうした二元的な生き方がうまくできずにいた。それは、1922（大正11）年1月下旬にパリで研究生生活を開始した頃から杢太郎の課題であったが、1923年2月の時点でも課題をうまく克服できていなかった。

心の中のふたつの争いをよくあらわしている詩がある。それは「四月某日ソレントの一旅舎にて作れる」というただし書きのある「エズギオの遠望」である。これは欧米留学中に書かれたなかでも、最もすぐれた詩の一つである。ところで、ソレントに滞在していたのは2月であり、4月はフィレンツェ、ボローニャ、パドヴァ、ヴェネチア、ミラノを回っていたのだから、4月という日付は杢太郎の記憶違いではないだろうか。おそらく2月18日から22日の間に書いたものであろう。それでは、少々長いがこの詩を全文引用しておこう。

### エズギオの遠望

はじ あめ は け さ し ま かげ  
始めて雨が晴れ、今朝、島の影が  
はつきりとして来た。三角、雪を戴く峰。  
は けむ くも つつ  
吐く煙は雲に包まれ、  
いらいらし、点、点、遠く立つ波。

しず やど  
静かなるソレントの宿。  
まど むか ものよ  
窓に向ひ、われ物読むとき、  
くうさう こぼう とほよ くわこ ちか くわこ  
空想と願望、遠き世の過去、近きわが過去、  
こんぐらがり、解けつ揺れつつ  
うちよ ひ かへ  
打ち寄する、また引き返す、――  
ふね ていぼう ち はもん ごと  
船着ける堤防、そこに散る波紋の如く。

おも うか たいわう みや む  
思い浮かぶ、カルナック、大王の宮居  
またちわう こんりふ だいがらん  
また女王ハチエプスウト建立の大伽藍。  
だいだう と ごと ひ かはざし  
大道は砥の如く、日ぐれにはニルの河岸、  
れいじん かさ ゆ す まひる み ゆめ  
麗人の傘ささせ、行きも過ぎけむ――真昼見る夢。  
みと む きみ げんさう  
認め居たり、わが君、ナフリット――幻想。  
しよせん まごと げんさう  
しよせん実にならぬ幻想。

それならもつとおちつ とし  
それならもつと落ちて――歳もくだった――  
ちうせいよ おろつば  
中世欧羅巴の  
かいめいし よ  
開明史でも読もうか。

もつと現実的げんじつてきな  
 強い世界つよ せかいを作るための貧者ひんじやの一灯いつとうにもと  
 せめて生きがひのあるわが世よを送らう。

「おや」とわたくしは驚おどろいた。  
 「おや、どうして。」「宿命すくめいですわねえ、  
 これが浄瑠璃じやうるりの文句もんくの、因縁いんねんとでも云いふのでせう。  
 わたし、来きましたわ、たうたう。」  
 指ゆびさし示しめす越こしかた。

「まあ洋服やうふくなんぞ着きて。でも似合にあふよ。」  
 「おかしいでせう、人ひとが笑わらふでせう。  
 いくら何なんと云いつたつてわたしに洋服やうふく。  
 見て下みさい、わたしかみの髪かみを。  
 油あぶらはいけぬといはれて唯ただオオ・ド・  
 コロオニユをつけたのよ。それにこんなに白髪しらが。

——もうあんまり遅過おそぎます——」

「もうあんまり遅過おそぎる——」  
 はつとしてまた考かんがへに耽へらうとする。  
 「おや、もう去ゆくの？」とわたくしは叫さけんだ。  
 「もうあんまり遅過おそぎます。」

波なみは姿すがたを載のせて遠とほく消きえ去さり、  
 ゴズゴオの山やまにはまた雲くもがかかる。  
 ナポリからの船ふねが汽笛きてきを鳴ならす。

学者がくしやとなつて生きるのが好よかつたか、  
 また情操じやうさうの往ゆくに任まかせて  
 市井無頼しせいぶらいの仲間なかまにはひり  
 ナポリ人の如びとく死ごとぬのが可しいか。  
 以太利亜人いたりやびとは知しるだらう。中世人道ちゆうせいじんだうの  
 先生せんせいは何なんと教をしへる

紛紛蠹魚の裡，是れ人，是れ生。

ようやく雨が上がり、ソレントの宿から遠くヴェスヴィオ火山が眺められる。吐く煙は雲に包まれている。海は点々と遠くに波が立っている。いま宿の窓に向かって物を読むとき、遠い世の過去と近いわが過去が、こんぐらかり解けたり揺れたり、堤防に散る波紋のごとく打ち寄せたり引き返したりしている。

思い浮かんでくるのは、見てきたばかりのエジプトの風景、大王の宮殿カルナック、女王ハトシェプスト建立の大伽藍（葬祭殿）。日暮れのナイルの川岸に傘をささせて麗人が行き過ぎる。これは白昼夢であろうか。いや、わたくしにははっきりわかった、美しき姫ナフリットだと。いやいや、これはやはり幻想だ、しょせん本当にはならない幻想だ。

それなら、もっと落ち着いて中世ヨーロッパの文明開化史でも読もうか。それとも、もっと現実的な強い世界を作るため、せめて生きがいのあるわが人生を送ろうか。

すると、急にひとりの女性が目の前にあらわれた。これには驚いたが、見覚えのある人だったから「おや、どうして」と声をかけた。すると、「わたし、来ましたわ、たうたう」と言葉を返してきた。こうしてふたりが再会するのは宿命であり、因縁であるという。女性が洋服を着ていることに気づいて、「似合ふよ」とやさしい言葉をかけた。女性は自分の洋服姿を人が笑うだろうと謙遜する。油はいけないといわれて、髪にオーデコロンだけをつけてきた。でも、こんなに白髪になってしまったと嘆く。結びの言葉は、「もうあんまり遅すぎます」。もう帰るのかと問うと、女性は同じ言葉を繰り返す。「もうあんまり遅すぎます」。

「指さし示す越しかた」とあるように、女性は過去を示している。かつてふたりは出逢い、互いに憎からず思った。けれども、ふたりは結ばれず、離れ離れになってしまった。心残りのある別れであった。こうして、再会を果たしたふたりだったが、女性の白髪に象徴されるようにお互い歳をとりすぎてしまった。それを強く意識した女性から返された言葉、「もうあんまり遅過ぎます」。この言葉は、愛情の問題に限ることはあるまい。何をするにもあんまり遅過ぎるのである。これは、女性の訴えであり、過去の教訓であり、また杢太郎の嘆きでもある。

波は女性の姿を載せて遠く消え去ってゆく。ヴェスヴィオ火山にはまた雲がかかる。ナポリからやって来た船が汽笛を鳴らす。

学者となって生きる（医学研究の道を選ぶ）のがよかったか、あるいは情操のゆくに任せて（文学・芸術の道を選ぶ）、市井無頼の仲間にはいりナポリ人のごとく死ぬのがいいか。イタリア人はそれを知るであろう。自分が尊敬している中世人道の先生たちはどう教えてくれるだろうか。ただたくさん本を読むばかりで、その真意を知らず、これを活用することもできない者の心の中では、本を読むことだけが人生なのである。

イタリアにやって来ても、杢太郎の心は医学研究と文学創作のふたつに引き裂かれてい

た。先述した和辻哲郎宛の手紙（1922年11月17日付）では、「僕も人生の半を過ぎた。そして前途の坂道が見える。もういろんな浮気もしてはゐられまいじゃないか」と書いて医学研究に専念する決意を示していたのだったが、ここでは情操のゆくに任せて（文学芸術に専念する）市井無頼の仲間にはいりナポリ人のごとく死ぬことに未練を残している。

## XV. パリで生まれた詩——巴璦山歌

柰太郎が欧米留学中に書き上げた詩は、キューバで書かれた6篇とイタリアはソレントで書かれた1編を含む「海ははるばる朦朧として女人のすがた」の7篇と、パリで書かれた「巴璦山歌」の11篇である。ここでは後者のいくつかをとりあげて、解釈を加えてみよう。平川祐弘氏の「パリ時代の柰太郎の詩『怨言』」（『西洋の詩東洋の詩』河出書房新社）によれば、「巴璦山歌」の「巴璦」は中国語風の綴りであり、「山歌」は「いなか歌」「ひな歌」の謂いである。

「巴璦山歌」はパリ留学中の柰太郎の内面を伝えている。日記に自分の心情を吐露する人は少なくないが、留学中の柰太郎はそれをよしとしなかった。留学中の彼の心の動きを知るには、『日記』ではなくむしろ「巴璦山歌」を読まなければならない。「巴璦山歌」をはじめとして、欧米留学時代の詩は従来あまり評価されてこなかった。その評価が正しいかどうか、これから実際に詩を読んでみよう。それでは、平明に書かれた短い詩からはじめることにしよう。

### リュクサンブール公園の雀

ベンチにかければすずめ雀が来、  
たがひ互にくつつきい異なるめ眼をし、  
みみ耳こすりでも言いふがごと如し。  
「あいつけちなやつ奴、あいつけちなやつ奴。」

ざんねん残念、あいにくぼん生憎麩包もなし。  
わが国では、なうすずめ雀、  
あしおと足音がすればに逃げてゆ行く。

柰太郎がパリで定宿にしていたのが、サンシュルピス広場に面したオテル・レカミエである。リュクサンブール公園はオテル・レカミエから徒歩で10分もかからない距離にある。リュクサンブール公園はパリ左岸にあつて、市民の憩いの場所である。広々としてのんび



りした雰囲気の良い公園で、平日でも多くの市民が訪れる。たぶん、杢太郎もときどきこの公園に足を運んだことだろう。

もちろん、現在でもこの公園には人々のこぼしたパンくずをねらって雀がやってくる。パンくずをやれば雀は喜んで近くにやってくるだろう。しかし、たとえパンくずをやらなくても、雀が互にくっついて異な眼をするわけがないし、「あいつけちな奴、あいつけちな奴」とささやき交わすわけもない。この日の杢太郎は心がよほど鬱屈していたのであろうか。雀がそんな悪口を言っていたように感ぜられたのである。自分の国では、雀はこの国のように人馴れしていないので、足音がすれば逃げて行くと詩人は弁解している。

野田宇太郎氏は『木下杢太郎の生涯と藝術』（平凡社）の中でこの詩をとりあげて、「杢太郎のポール・ジェラルディ的なセンスがパリではパリらしく顔を出している」と評しているが、わたしにはそうは思われない。この詩のどこにポール・ジェラルディ的なセンスがあるのだろうか。動物に対するフランスの風習と日本の風習の差を感じた詩人が書いた、いささか弁解がましい詩になっているのではないだろうか。

さて、次もまた短い詩である。日本の女優がパリでどんな評判をとったかを扱っている。

### 女優の評判

これが御国の女優なんですつて？

頸が細いわねえ。

頭が大きいわねえ。

脚が短いわねえ。――

それはですな。

そもそも、昔、我国の演劇は

人形芝居に型を取りつるなり。御存知ですか、藁の胴へ

細い首をすげるのです。

その風習が今も残り……

パリの人々にとって日本の女優は初めてではない。1900年、パリ万国博覧会の年に、川上音二郎一座は会場の一角にあったロイ・フラワー劇場で公演を行った。この舞台に立ったのが、音二郎の妻である貞奴である。公演は大成功をおさめ、主演の貞奴は一躍パリの有名人になった。彫刻家のロダン、小説家のジッド、画家のピカソなどは、貞奴の演技を絶賛したという。この貞奴は、また日本の女優第一号になった人物である。

杢太郎がパリに着いたのは、1921（大正12）年であるから、貞奴がパリで評判をとって

頃から、もう20年以上も時間がたっている。貞奴の人気もすでに過去のものになっていたのであろう。だから、この詩に出てくるフランス女性は、初めて日本の女優を見たのである。彼女は詩人が持参した女優の写真を見ているのだろう。日本の女優は、首は細いけれど、頭は大きすぎるし、脚がとても短いといったように、まず体格からしてフランスの女優にはかなわない。

詩人もそれが気になって、次のような弁解を試みている。つまり、昔は日本の演劇は人形芝居から型をとっていた。藁でできた胴体に、細い首を上げるという風習が今も残っているので、女優の首が細いのである。柰太郎は文楽のことを念頭に入れているのだろうと思われるが、とってつけたような弁解であり説得力はない。いままで読んできた2篇の詩のほかに、「絵入週刊」（週刊は週刊誌のこと）も結末に「それはね、<sup>なん</sup>何と言ひましたな、<sup>おくに</sup>／御国の<sup>ことば</sup>言葉で？——／わたくしの<sup>くに</sup>国では言ひます／くりからもんもん、<sup>いぬだこぶんご</sup>犬田小文吾」（犬田小文吾は滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』の登場人物）という弁解めいた言葉が見出される。

ヨーロッパ人と日本人の体格を比べてみれば、日本人のほうが劣っているのは、いたしかたない。近年では日本人も体格がよくなってきたが、それでもヨーロッパ人と肩を並べるところまでいっていない。ましてや、これは今より80年以上も前のことであるから、体格について日本人がヨーロッパ人に対して劣等感を持っていても不思議は無い。

それでは、次は一番短い詩を選んでみよう。

#### 或本の序詞

ひ  
日はつねに速く  
ひと  
人はつねに遅れる  
おく やつ  
遅れぬ奴は  
ゆふめし あじし やつ  
夕飯の味知らぬ奴  
かって  
勝手にするがよい。  
し あ と お ぢ け む  
CHATEAU D' IQUEM  
せんきうひやくじふいち  
1 9 1 1

日（時間）はいつも速く過ぎてゆく。そんなに速く過ぎていく日（時間）に人はついてゆけない。でも、それが普通の人間の常である。驚くことに、時間に遅れない人間もいるのだ。フランスでは、日本と違って夕食にたっぷり時間をかける。おいしい料理に舌鼓を打ち、とっておきのワインを空けて、愉快的な会話に花が咲く。そんな食事の楽しみを知らない人間がいる。時間をきっちり送る人間である。そんな奴は夕飯の楽しみ方も知らない

のだから勝手にするがいい。さて、今夜は美酒シャトー・ディケムの1911年ものを酌み交わすことにしよう。杢太郎は人生の楽しみを知っていた。そんな杢太郎は若い頃から軽い小唄が得意だったが、これはパリで生まれた、人生を楽しむ小唄である。

さて、パリにマロニエの花が散る頃に書かれた詩がある。今度はそれを取り上げよう。

### マロニエの花

それはあの<sup>ぼりい</sup>巴里の  
 いつもの曇<sup>くも</sup>り空<sup>ぞら</sup>にマロニエの花<sup>はな</sup>の  
 散<sup>ち</sup>るような日<sup>ひ</sup>であった、  
 わたしは一人<sup>ひとり</sup>の寂<sup>さび</sup>しいエトランゼエとして  
 ある橋<sup>はし</sup>の欄干<sup>らんかん</sup>に身<sup>み</sup>をもたせて  
 ぢつと行く水<sup>ゆ</sup>を眺<sup>み</sup>むる人<sup>ひと</sup>であった。  
 などと、二年<sup>にねん</sup>もすると  
 罫<sup>けい</sup>の引<sup>ひ</sup>かれた紙<sup>かみ</sup>に  
 物<sup>もの</sup>書<sup>か</sup>く身<sup>み</sup>となるのかしら。

マロニエは初夏に赤色を帯びた白色の4弁花を開く。このマロニエは欧米で街路樹として好まれ、パリのそれは有名である。年間を通じて、パリはあまり天気の良い街である。この日もまた曇り空であり、街路樹のマロニエから花びらが散っていた。詩人はセーヌ川にかかったある橋の欄干に身をもたせて、自分を寂しい<sup>エトランゼ</sup>異邦人と感じながら、流れ行く川の水をじつとながめて、物思いにふけていた。

パリにひとりで生活して寂しさを感じているこの日本人（杢太郎自身でもある）の姿はいささか紋切り型で、これだったら誰でも思いつきそうである。だが、そんな自分の姿をもうひとりの自分が見ているところに杢太郎の独自性がある。2年もたったら、そんな姿、そんな心境を落ち着いて原稿用紙に書くような自分になるのではないかと自問している。自分のことをもうひとりの自分が眺めている。抒情詩を書いても杢太郎が決して感情に流れないのは、自分を客観的に見る目をもっているからである。

それでは、今度はいささか趣向を変えて、支倉常長を扱った詩を読んでみよう。

### 七つ森

ひさ<sup>ひさ</sup>しく七<sup>なな</sup>つ森<sup>もり</sup>の雪<sup>ゆき</sup>を見る。  
 たとへ世<sup>よ</sup>が世<sup>よ</sup>なりとするも八年<sup>はちねん</sup>苦心<sup>くしん</sup>の羅馬<sup>ろおま</sup>、

語る<sup>かた</sup>こと<sup>ひと</sup>一つもなし。  
 無<sup>な</sup>きに<sup>あら</sup>非<sup>わか</sup>ず、分<sup>わか</sup>から<sup>な</sup>なんだ。  
 不<sup>ふ</sup>遇<sup>ぐう</sup>は<sup>も</sup>つ<sup>つけ</sup>の<sup>さいは</sup>幸<sup>さい</sup>ひ。  
 も<sup>し</sup>か<sup>し</sup>て<sup>こう</sup>後<sup>せい</sup>世<sup>せい</sup>お<sup>れ</sup>を  
 戯<sup>ぎ</sup>曲<sup>きよく</sup>なん<sup>ご</sup>ぞ<sup>ご</sup>に<sup>と</sup>志<sup>こころざ</sup>す<sup>で</sup>や<sup>つ</sup>が<sup>し</sup>出<sup>で</sup>る<sup>か</sup>知<sup>し</sup>れ<sup>ぬ</sup>。  
 そ<sup>れ</sup>は<sup>お</sup>お<sup>ほ</sup>大<sup>か</sup>馬<sup>ば</sup>鹿<sup>か</sup>。  
 へ<sup>へ</sup>んと<sup>あ</sup>或<sup>ひ</sup>る<sup>ひ</sup>日<sup>は</sup>の<sup>は</sup>支<sup>は</sup>倉<sup>せくら</sup>が<sup>つ</sup>ぶ<sup>や</sup>いた。

支倉常長（1571-1622）について、主として『岩波日本史辞典』により簡単に説明しておこう。常長は江戸時代初期の仙台藩士で伊達政宗の家臣である。政宗は、幕府の意向を受けスペインとの通商を求めて、スペイン国王・ローマ教皇のもとに使節を派遣した。これを慶長遣欧使節といい、支倉常長が大使をつとめた。1613（慶長18）年、伊達政宗の命によりフランシスコ会宣教師ルイス・ソテロに伴われ、約180人を引き連れて陸奥牡鹿郡<sup>つきのうら</sup>月浦を出帆した。メキシコ経由でマドリード、ローマに至り、1615年、スペイン国王フェリペ3世、ローマ教皇パウルス5世に謁見して、政宗の書状を呈した。なお、常長はマドリードで洗礼を受け、ドン・フェリペ・フランシスコなる洗礼名を授かった。けれども、通商交渉は失敗し、スペインからメキシコを経てマニラに渡り、1620年、同地から仙台に戻った。帰国時にはすでに禁教令が出されていて、晩年は不遇であった。

この詩はスペイン、イタリアから帰国した支倉常長が、自らの過去を振り返って独白するという形式になっている。タイトルの「七つ森」とは、仙台の北に位置する七つの山の総称である。

こうして故国日本にもどって、七つ森の雪を見るのも本当にしばらくぶりである。慶長遣欧使節としてスペインに渡航してマドリードを訪ね、さらにイタリアに渡ってローマを訪問した。その行き帰りの旅は苦心の連続で、足かけ8年を費やした。はるか遠い日本から来たということで、ローマでは歓迎もしてくれた。自分は貴族にも列せられた。けれども、伊達政宗公がまだキリスト信徒ではないとの理由で、残念ながらパウルス5世とは公式の謁見にはならなかった。

いまにして思う、苦心惨憺の8年間で得たものは何か。自分には語ることはひとつもない。いや、無いわけではない、わからなかったのだ。それでは、常長はいったい何がわからなかったのであろうか。ここでは、キリスト教そしてそれを生んだヨーロッパと解釈しておこう。すると、この後は次のような述懐となるであろう。自分は洗礼も受けたし、洗礼名も授かった。それでキリスト信徒になれたのだらうか。キリスト教とはいったい何だったのか。自分にはわからなかった。ただ、この支倉常長はフィクションであって、実際に常長が「無きに非ず、分からなんだ」という嘆きを口にするとはいえにくい。

常長のこの悲嘆は、たとえヨーロッパに留学したとしても、ヨーロッパをとらえることは至難のわざであるという柰太郎の認識と重なる。それがどんなにやっかいなことであっても、ギリシア・ラテンの古典に遡ってヨーロッパを理解しなければならない。ギリシア語・ラテン語を習得する時期を失ってしまった柰太郎は、ヨーロッパを根底的にとらえる道を発見はしたが、その道を進むことは断念した。柰太郎の悲哀を、常長の台詞にそっくり重ね合わせることができよう。

もしかしたら、後の時代に、こんな自分を戯曲に仕立てようなどという奴が出るかもしれない。そんな奴は大馬鹿者である。じつは、この「大馬鹿者」とは、柰太郎自身のことだった。柰太郎は常長を主人公とする戯曲を、1928(昭和3)年4月に雑誌『女性』に発表した。タイトルを「常長」という。この「七つ森」を書いたときには、いつか常長の戯曲を創作しようと思っていた。だから、「大馬鹿者」というのは、柰太郎の自嘲である。

ここで、戯曲「常長」に触れておこう。全体は何幕何場という形ではなく、第1景から第7景までである。主要な登場人物は佐藤太郎左衛門と支倉六衛門常長である。太郎左衛門は常長の召使で、慶長遣欧使節に同行して、いまだにキリスト教を厚く信仰している。常長が久しく蟄居<sup>ちつきよ</sup>して重い病をかかえていると聞いて、太郎左衛門は雪の日に訪ねてくる。ふたりが会えば思い出すのは、やはりあのマドリッド、ローマ行きである。マドリッドで国王フェリペ3世に謁見したとき、さらに、ローマで教皇パウルス5世に拝謁したときのことを語って話はずきない。ところが、ローマのサン・ピエトロ寺院で常長は、教皇の前にひざまずいてその御足に三度接吻したが、それを忍辱と感じたと告白する

キリスト信徒にあるまじき言葉に動揺する太郎左衛門に、常長はさらに続ける。太郎左衛門は(キリスト教の)神を心より信じていて教皇にも忠勤をつとめているが、自分が思うところは一代の名誉、御国への誠忠に他ならない。この言葉に太郎左衛門は目の前が真っ暗になる。常長はさらに次のように続ける。「心にいろいろの企画を抱いて、長の旅から故里の港に帰りつくと——言ふまでもない、このやうな世の変転だ。(中略)われ等は互いに別々の夢を見てあつたのだな。佐藤氏、夢であつた。まことに夢、夢、夢であつたぞ」太郎左衛門は胸が張り裂けるような気持ちを抱いて、常長のもとを立ち去ってゆく。

最終の第7景には40歳を過ぎた旅人が登場してその心境を独白する。まず自らをつまらない旅の者であると謙遜した旅人は、仔細あって支倉常長の事跡を調べたいと思ってこの地にやってきたという。この旅人に柰太郎自身が色濃く投影されている。そんな箇所を引用しておこう。

わたくしにもあの人の心持は分かりますよ。あの人の夢、あの人の幻、そしてまたあの人の悩、悲も、自分のもののやうに、はっきりと思ひ浮べることが出来ます。わたくしも青年時代に、役人となつて長らく欧羅巴の地に居りました。その国土の美不

